

PandarusとTroilusとの隔たり

川上 彰子

Chaucerの*Troilus and Criseyde*に登場するPandarusは、Troilusの親友、Criseydeの叔父として二人の取り持ちをするという大事な役割を持っている。そのPandarusの役割の大きさはこの作品の種本であるBoccaccioの*Il Filostrato*のPandaroの比ではない。PandarusはTroilusのためにまさに東奔西走、八面六臂の活躍をする訳であるが、ここではこの親友の鑑のようなPandarusと、Pandarusのお陰で恋を成就できたTroilusの間の精神的な隔たりというものに焦点を当て、それがこの作品のポイントの一つになっているのではないかということを結論付けていきたいと思う。

それではまず、ChaucerがPandarusを創りだすためにBoccaccioの作品*Il Filostrato*におけるPandaroをどのように変えているかを見て、その存在の特異性を確認したい。一番大きな違いはBoccaccioのPandaroが単なる取り持ち役の域を出ないのに対し、ChaucerのPandarusはもっと深くTroilusとCriseydeの恋にかかわりあっていることであろう。

BoccaccioのPandaroがあまり活躍しないのはTroiloとCriseidaの二人の恋人たちがChaucerの恋人たちに比べ、非常に積極的であるからである。手紙の交換のあと『Troilo様はお前をいつ訪れればよいのか』とPandaroに聞かれるとCriseidaは自ら日時を指定する(Ⅱ, 142)。そしてその晩一人でやってきたTroiloにわざわざ咳払いをして自分の存在を確認させ、すぐにベッドへと彼を伴うのである(Ⅲ, 26-30)。TroiloもCriseida同様、積極的であるので、Pandaroは単なる取り持ち役以上のことをする必要はない。

片やPandarusの活躍ぶりには実に見張らせられるものがある。彼はBoccaccioには見られない、恋人たちのための二つの密会計画 —— 一つはDeiphebusの館での密会、もう一つはPandarusの家での密会 ——

をたてる。Deiphebusの館で二人を会わせるために彼はCriseydeだけでなく、Troilusの兄 Deiphebus、またHelenまでもCriseydeが窮地に陥っていると嘘をつく。一方Troilusの方には病気のふりをして寝ているようにと言い、嘘の上に成り立つ非常に危険な状況を作り出している。

もう一つの密会計画も非常に手の込んだものである。占星術で大雨になることを知ったPandarusはCriseydeの家に行き、彼女を強引に自分の家での食事に招く。予想どおり大雨になったのでCriseydeは泊まらざるを得なくなり、そこにPandarusが秘密の通路からCriseydeの部屋に入り、Troilusが今やってきたこと、そしてCriseydeが他の男を愛しているという噂をTroilusが聞き、苦しんでいるという真っ赤な嘘をCriseydeに告げる。

Pandarusのように入り組んだ計画を立てる取り持ち役はBoccaccioには勿論、やはり *Troilus and Criseyde* に大きな影響を与えた『ばら物語』にも見られない。『ばら物語』でPandarusのような役回りをしているのは失意の「恋人」を慰める「友人」や、「恋人」から賄賂をもらって「歓待」と「恋人」の取り持ちをする「老婆」であろうが、彼らは二人とも直接自ら計画を立て「恋人」とバラに象徴される美しい婦人、または「歓待」を取り持つことは決してない。ChaucerはBoccaccioのPandaroや、『ばら物語』の「友人」や「老婆」とは全く違う「行動する取り持ち役」を創り出したのである。

Pandarusが二つの計画をたて、それらを遂行するのを喜んでいるのは彼がTroilusの姿に自らの姿をそれを重ねて行動しているからだと思われる。BoccaccioのPandaroがCriseidaの従兄であるのに対し、ChaucerがPandarusをCriseydeの叔父としていることはよく知られていることであるが、その変更によってPandarusがPandaroより、そしてTroilusよりも大分年長であることは充分考えられる。⁽¹⁾ またPandarusは自分の恋がうまくいっていないことを自ら言いもし、そのことをTroilusやCriseydeにも言われている。彼が実際に報われない恋に苦しんでいる姿もⅡ巻のはじめに描かれている。

That Pandarus, for al his wise speche,
 Felt ek his part of loves shotes keene,
 That, koude he nevere so wel of loving preche,
 It made his hewe a-day ful oft greene.
 So shop it that hym fil that day a teene
 In love, for which in wo to bedde he wente,
 And made, er it was day, ful many a wente.

(II, 57-63) ⁽²⁾

恋に苦しむ姿はBoccaccioのPandaroには見られない。Pandarusの年令を考えると現在、そして将来ともに恋の成功の可能性はないようである。Troilusよりも大分年長で、自分の恋に希望を見いだせないPandarusが若く、勇ましく、血統の良いTroilusに我が身を重ね、Troilusと共に恋の成功を味わおうとするのはきわめて自然なことであろう。

Troilusに自分を同化していることはBoccaccioのPandaroがTroiloから自分の従妹のCriseidaを愛していることを聞かされた時、

"Poichè sentendo te saggio ed accorto,
 A lei e ad amendue posso piacere,
 E a ciascuno donar pari conforto,
 Poscia che occulto il dovete tenere,
 E fia come non fosse; . . . " (II, 28) ⁽³⁾

(Therefore, since I know thee wise and reasonable, I can
 please her and both of you and give you each equal comfort,
 provided you undertake to keep it secret, and it will be
 as though it were not.)

と言って、TroiloとCriseidaの二人を喜ばせることを強調しているのに対し、ChaucerのPandarusが

" . . . for ye ben bothe wyse,
 And konne it counseil kepe in swych a wyse

That no man schal the wiser of it be;
And so we may ben gladed alle thre." (I, 991-94)

と三人、つまりTroilus、Criseydeの他にPandarus自身が喜ぶことを強調することによって自分自身を二人と同じ次元に引き上げていること、また、王子が姪を愛していると彼女に告げる時もBoccaccioのPandaroはTroiloの苦しみを伝え、Troiloを死から救うことのできるのはCriseidaだけ(II, 64)だというのみであるが、ChaucerのPandarusはCriseydeがTroilusを拒絶することがあればTroilusだけでなく、自分も死ぬと言ってCriseydeを脅すこと(II, 323-34)などからも明白であろう。

そしてついにDeiphebusの館でCriseydeがTroilusに口付けするのを見るや、天に目を向け、両手を高くあげてあたかも自分が恋の成功者であるかの如く感激の言葉を述べるのである。

"Immortal god," . . . "that mayst nought deyen,
Cupide I mene, of this mayst glorifie;
And Venus, thow mayst maken melodie!
Withouten hond, me semeth that in the towne,
For this merveille ich here ech belle sowne."

(III, 185-89)

このように我が身をTroilusに重ねたPandarusはTroilusの最大の理解者であるように見えるが、しかしPandarusとTroilusの間には埋めることができなかった隔たりがあり、筆者にはそれがこの話のポイントの一つになっているように思えるのである。

PandarusとTroilusとの間の隔たりは恋の目的に対する二人の考え方の違いから先ず生じる。BoccaccioのTroiloはCriseidaに会った直後に

"Or foss'io teco una notte di verno,
Cento cinquanta poi stessi in inferno." (II, 88)
(Might I pass a winter's night with thee, I would then

remain an hundred and fifty in hell.)

と述べ、自分の目的がCriseidaとの肉体関係にあることをはっきりさせている。このようなTroiloの態度は『ばら物語』の「恋人」にも共通するものである。「恋人」は「歓待」がバラのつばみのすぐそばにある葉をとって「恋人」に渡してくれた時に

《Sachiez, biau sire,
qu'Amors durement me tormente.
Ne cuidez pas que je vos mente:
il m'a ou cors .v. plaies fetes,
ja les dolors n'en seront tretes,
se le bouton ne me bailliez,
qui est des autres mieuz tailliez:
ce est ma mort, ce est ma vie,
de nule rien n'ai plus envie.》(2882-90)⁽⁴⁾
(Fair sir, pray do not think
That I would lie to you. The God of Love
Torments me so severely that he's made
Five wounds within my heart, whose ceaseless pain
Will last until I gain that best-shaped bud.
Naught else I wish; for it I live or die.)⁽⁵⁾

と、自分の欲しいものはバラのつばみそのものであるとし、バラ — つまり恋の相手である婦人 — との肉体関係をほのめかしている。

BoccaccioのTroiloや『ばら物語』の「恋人」に比べるとTroilusの目的は非常に曖昧なものである。Criseydeを一目見て恋に落ちたTroilusは” . . . with som frendly lok gladeth me, swete, / Though nevere more thing ye me byheete.” (I, 538-39) と言うのみであり、女神のようにCriseydeを慕うTroilusにはその後も肉体関係をはっきりと希望する言葉は見いだすことはできない。これはC. S. Lewisが指摘するようにChaucerが” a poet of courtly love”⁽⁶⁾の立場から書いているからであ

ろう。

このように恋の目的が曖昧であるTroilusと違い、目的がはっきりとわかっているのはPandarusである。彼はCriseydeの意向が”・・to love hym unwist, ・・/ And guerdoun hym with nothing but with sighte.” (Ⅱ, 1294-95) と「Troilusに報いるにしても会うだけ」という消極的なものであるのに対し、”It shal nought be so, / Yif that I may; this nyce opynyoun / shal nought be holden fully yeres two.” (1296-98) と心の中で決意する。PandarusにとってCriseydeは狩のゲームの獲物であり、彼女を鹿にも例えるのである(Ⅱ, 1534-35)。

女性に対する伝統的な「女性は皆、好色」というアリトテレスと聖書に始まる大量の医学、法律、神学の文献によって支持されていた考え方が⁽⁷⁾ このPandarusの考えの根底に存在するのであるが、Chaucerは上手にPandarusがあからさまにそのような言葉を吐くことを回避している。BoccaccioのPandaroがTroiloを励ます際の

Io credo certo, ch'ogni donna in voglia
Viva amorosa, e null' altro l'affrena
Che tema di vergogna; e se a tal doglia,
Onestamente medicina piena
Si può donar, folle è chi non la spoglia,
E poco parmi gli cuoca la pena.
La mia cugina è vedova, e disia;
E se 'l negasse nol gliel crederia.” (Ⅱ, 27)

(I believe indeed that in desire every woman liveth amorously and that nothing but fear of shame restraineth her. And if to such anguish a full remedy may properly be given, foolish is he that doth not ravish her. And little in my opinion doth the punishment vex her. My cousin is a widow and hath desires; if she should deny it, I would not believe her.)

という言葉や、『ばら物語』の「友人」が「恋人」を励ます際の

《・・・ cuillez la rose tout a force
et moutrez que vos estes hon,
quant leus iert et tens et seson,
car riens ne leur porroit tant plere
con tel force, qui la set fere;
car maintes genz sunt coustumieres
d'avoir si diverses manieres
qu'il veulent par force doner
ce qu'il n'osent abandoner,
et faignent qu'il leur soit tolu
ce qu'il ont soffert et volu.
Si sachiez que dolent seroient
se par tel deffanse eschapoient;
quel que leesce qu'il fainaissent, . . . 》

(7660-73)

(Lay hands upon your Rose with might and main;
And prove yourself a man when with the time
The place and the occasion both agree.
Nothing, perhaps, will please them more than force
Employed by one who understands its use
There's many a one whose nature's so perverse
That what she dares not give she'll yield to strength
And feign that what she would permit and wish
Has ravished been from her against her will
Know well that such a one might sorely grieve
If her trumped-up defenses should succeed
No matter how much joy she might pretend.)

のような女性の人格を全く無視した男性本位の言葉をPandarusが述べる
ことはない。彼の言葉はBoccaccioのPandaroや『ばら物語』の「友人」
に比べるとかなり品の良いものになっている。

" . . . have I herd seyde of wyse lered,
 Was nevere man or womman yet bigete
 That was unapt to suffren loves hete,
 Celestial, or elles love of kynde;
 Forthy some grace I hope in hire to fynde." (I, 976-80)

しかし彼の行動を見ると、彼の考え方の根底にあるものはPandaroや「友人」と全く共通するものなのである。Pandarusの計画した恋人たちの二つの密会にしても両方ともCriseydeを騙すことから始まる。Deiphebusの館の場面で、Troilusが病気のふりをして恋人の到来を待つという設定はMuscatine⁽⁸⁾が認めるように聖書の「サムエル記」(II, 13:1-20)の話と多くの共通点がある。この話はAmnonからTamarという女性を好きになったと相談を受けた親友のJonadabが、Amnonには病気のふりをするように、TamarにはAmnonの看病をするようにと言い、何も知らないでAmnonのところに行ったTamarに対し、Amnonが無理遣り思いを遂げてしまうもので、Chaucerが実際にこの聖書の話からDeiphebusの館での恋人たちの密会場面を作り出したかどうかは定かではないが、彼がウルガタ聖書を折りに触れて使用したのは確かなことであり、その可能性は充分にある。

もう一つの恋人たちのためのPandarusの家での密会計画も、当時非常に流行していたラテン語詩のPamphilus⁽⁹⁾が影響を与えているとGarbáty⁽¹⁰⁾は指摘している。美しいGalatheaに恋をしたPamphilusが老婆に取り持ちを頼む。老婆は自分の家にGalatheaを招き、そこに打ち合せ通りPamphilusがやってくると老婆は隣人が呼んでいると言ってさっさと姿を消してしまう。その間にPamphilusがGalatheaに対し、力ずくで肉体関係を結んでしまう、という話である。

Pandarusの二つの計画のもとになっているものが、もしもウルガタ聖書とPamphilusだとすれば、奇しくもそれらは女性を騙し、女性の意志を無視したレイプという結末で終わるものである。Troilus and Criseydeの場合ではどちらも勿論このような結末にはならないが、PandarusがCriseydeを騙してTroilusと肉体関係を持たせようとしている点では、

Pandarusが伝統的な女性蔑視の考え方でいることは確かなことであろう。

これに反してTroilusはCriseydeを女神のように崇め、彼女の前では思っていることも言えないでいる。Deiphebusの館の小部屋でもCriseydeが現れる前には「あれも言おう、これも言おう」と計画するが、実際に最初にやっと言えるのは恐怖で震える声で "Mercy, mercy, swete herte!" (Ⅲ, 98) という言葉だけである。そしてしばらくの沈黙のあと、やはり非常にへり下った態度で自分の苦しみを訴え、彼の望みがCriseydeが彼を時々やさしく眺めてくれることと、彼がCriseydeに仕えることであることを告げる (Ⅲ, 128-40)。ここでのTroilusの目的はCriseydeを初めて見た時と同じ、「Criseydeに仕える」という曖昧なもののみである。

肉体関係を結ぶことを明言しないTroilusと、伝統的な女性観をもってことに当たろうとするPandarusとの隔たりが最も明確になるのはPandarusの家での二人の密会の場面であろう。Pandarusの計画通り、彼の家に泊まることになったCriseydeに対し、PandarusはHorasteという男への嫉妬に苦しむTroilusが大雨の中をやってきたという嘘をつく (Ⅲ, 785-98)。Criseydeを自分の家に招待する際の「Troilus様は今、町にはいらっしゃらない」というPandarusの嘘 (Ⅲ, 570) をCriseydeが見抜いていたかどうかについては意見が分かれるところであるが、PandarusがCriseydeを騙そうとしたのは明白なことであり、今度のHorasteの件については弁解の余地はない。

Pandarusの家、一人で部屋にいるCriseyde、そしておあつらえ向きの大雨とこの上ない絶好の場を提供してくれたPandarusの期待に反してTroilusは全く自信が持てないままにいる。彼は思いつく限りのありとあらゆる神に祈る。このような恋人の姿はBoccaccioのTroiloにも、また『ばら物語』の「恋人」にも見出だすことはできない。Troiloにしても、「恋人」にしても、勿論『ばら物語』の場合にはアレゴリカルにはあるが、相手の女性との肉体関係に向けて躊躇することは全くないのである。

Pandarusに言わせれば "wrecched mouses herte" (Ⅲ, 736) のTroilusは

Criseydeとの大事な夜に、ついに気絶をしてしまうことになる。このTroilusの気絶はBoccaccioの中にも見られるものであるが、それはAntenorとCriseidaとの交換が決定された場面(Ⅳ, 18)で起きる。心理学的な見地から見れば、あこがれの恋人と二人になれるチャンスの時に気絶をするより、Boccaccioのように恋人がトロイを去ることが決定した時に気絶をする方がより自然だと思われる。何故、Chaucerはこのような無理をしてまで気絶の場面を初夜の晩に持ってきたのだろうか。この気絶の場面を移動させることによってChaucerはPandarusとTroilusとの隔たりを明確にしていると思われるのである。

Pandarusは伝統的な"jalousie is love"(Ⅲ, 1024)という考えに固執しているが、⁽¹¹⁾ Troilusはそのような考えを実際の行動に移すには非常にためらいがある。実際に彼は一言も自分の「嫉妬」が何のために起きたのかは説明していない。ところが恋人たちに肉体関係を結ばせるためには手段を選ばないPandarusはどんどん一人歩きし、Criseydeの前で跪くTroilusのためにクッションまで取りにいつてしまう(Ⅲ, 964)。ただPandarusにとって予定外だったことは、TroilusがPandarusの期待したようには行動できなかったことである。TroilusにはBoccaccioのTroilo、『ばら物語』の「恋人」、ひいてはPamphilusやAmnonに見られる肉体的結合という目的に向う積極性が皆目なかったからである。

Troilusが一番恐れるのは女神のように崇めるCriseydeが彼に対して怒ったり、悲しんだりすることであり、故にCriseydeがいわれもない疑いをかけられ、嘆き悲しむのを見ると、「自分が生まれてこなかったならば・・(Ⅲ, 1072-73)」とさえ思い詰めてしまう。ここでのTroilusはいわゆるcourtly loveの世界の中の典型的な騎士であり、Criseydeに従属すること以外は考えられない。このTroilusとは違いPandarusにとってCriseydeは自分の意のままに動く社会的立場の弱い未亡人であり、お互いに冗談の言える生身の女である。また、PandarusはCriseydeについて

"And for to speke of hire in specyal,
Hire beaute to bithynken and hire youthe,

It sit hire naught to ben celestial
As yet, though that hire liste bothe and kowthe;
But trewely, it sate hire wel right nowthe
A worthi knyght to loven and cherice,
And but she do, I holde it for a vice.” (I, 981-87)

と述べており、PandarusがTroilusのようにCriseydeの美しさが天上のものであるようには考えていないことがわかる。

Criseydeを悲しませる結果になってしまったPandarusの計画の失敗を見てTroilusは今、自分がどこにも逃げようのない袋小路に追い詰められたことを自覚する。彼はPandarusの意図の通り、「嫉妬は恋」だと強引に迫ることもできなければ、今となってはこれが全部嘘だったということもできない。⁽¹²⁾ 何故ならそれを明かせば今までの恋の成り行きについてもCriseydeが疑いを持つのは当然であろうからである。何の打開策もない時に、つまりTroilusがPandarusの女性に対する伝統的な考えについていけないと悟ったときに気絶が起きるのである。Troilusはこの時初めてPandarusに対し、否定的な思いを抱くことになる。

彼は「君の企ては何の役にも立っていない(Ⅲ, 1077-78)」と心の中で思い、「ことの全てがわかれば、私の責任ではないことは確かなのだ(Ⅲ, 1084-85)」と言ってついに気絶をする。この気絶が起きたお陰で事態は急展開をするのである。Troilusは気が付けばおあつらえ向きに衣服が脱がされてCriseydeのベッドに寝かされており、その上Criseydeが一生懸命介抱してくれている。こうしてもらってTroilusは初めて自分の目的が何であるかに気付いたように見えるのである。彼はここでやっと肉体関係における男性の主導権を行使するにいたる。Pandarusの意図通りに最終的にはTroilusとCriseydeは初夜を迎えることができたのではあるが、そこに至る過程ではTroilusの気絶という事態を通してPandarusとTroilusの精神的な隔たりが明らかになっているのである。

この二人の隔たりはCriseydeがギリシア陣営に下ることが決定したあと、更に顕著になる。Criseydeがトロイを去らなければならないことで嘆き悲しむTroilusに、Pandarusはこれは全て運命の女神の為せる業であ

り、故に諦めて別の女性を捜すように忠告する(IV, 381-406)。”Swich is this world!”(IV, 390)という現実の力に早々に屈した、投げ遣りのようなPandarusの言葉は、今まで自分がかかわってきた二人の恋の世界からの離脱を意味している。

Troilusは勿論、そのようなPandarusに猛烈に反発する。別の女性を捜せとの忠告にも彼は「Criseydeほどの女性は見つけられない。何故なら彼女と、自然によってこの世に創られたものとは比較にならないからだ(IV, 499-451)」と言ってきっぱり否定するのである。BoccaccioのTroiloもTroilus同様、Pandaroの別の女性を・・・との忠告を拒絶するものの、Troilusと違いCriseidaに会う前にも恋の経験をしているTroiloは

”Come che belle leggiadre ed accorte

Sian l'altre donne ed io il ti confesso, . . . ” (IV, 50)

(Although the other ladies are fair, winsome, and well-bred —
and I confess to thee that they are so . . .)

と言って「他の婦人たちが美しく、魅力があり、育ちが良い」ことは少なくとも認めている。つまりChaucerのTroilusの方がBoccaccioのTroiloよりもずっと純粋にCriseydeのことを崇めているのである。

現実を負けてしまって、すぐに諦めるPandarusと、純粋な恋の世界に浸りきって、諦めることのできないTroilusのこの二人の違いが、「人間の自由意志」と「神の予見」についてのTroilusの高級な哲学的議論の場面(IV, 958-1078)からPandarusが除外されている理由になっているのかもしれない。このTroilusの哲学的議論はPandarusがCriseydeのところへTroilusの言付けを伝えに行っている間に、長い独白の中で行なわれるもので、議論が終わってからPandarusは登場することになる。ここでもPandarusは「恋の喜びは賽の目の出たところ勝負で、来たり逃げたりするものだ。(IV, 1098-99)」という単純な運命論をTroilusに投げかけ、高度な哲学的議論をしていたTroilusとは思想的にも隔たりを見せることになる。TroilusがCriseydeとの恋によって、彼女に会う前の尊大な若者から立派な恋人へと成長し、更に哲学的議論ができるまでに成長するの

に対し、Pandarusは「恋の喜びは賽の目次第」のような運命の女神が全てを支配するという考えの中にいるままで成長が見られないのである。

Criseydeがトロイを去ったあとも、現実には負け、Criseydeが帰ってこないと早々に諦めるPandarusと、Criseydeを理想化し、彼女が約束どおり帰ってくることを信じようとするTroilusとはますます大きな対比を見せる。Criseydeが帰ってくるのを待ち焦がれるTroilusには、荷車さえもが彼女に見えてしまうが、姪が帰ってこないと諦めているPandarusには荷車は彼女には見えない。そして表面的にはCriseydeが帰ってくるといふTroilusの意見に同意しながら、心の中ではTroilusに冷笑を向ける。

Pandare answerde, "It may be, wel ynough,"
And held with hym of al that evere he seyde,
But in his herte he thoughte, and softe lough,
And to hymself ful sobreliche he seyde,
"From haselwode, there joly Robyn pleyde,
Shal come al that that thow abidest heere.
Ye, fare wel al the snow of ferne yere!" (V, 1170-76)

Pandarusの中では二人の恋はとっくに終わりを告げているが、Troilusは最後まで望みを失わず、Criseydeの裏切りを暗示する夢を見たあとも彼女を崇める態度は変わらず、彼女への手紙のなかでCriseydeを「わたしの導きの星(V, 1392)」とさえ呼ぶのである。

そしてCriseydeの裏切りが決定的になった時、つまりTroilusの信じて疑わなかったものが完全に否定された時、彼は精神的に全く立ち上がることができなくなってしまう。彼にとっての唯一の救いは死のみであり、ようやくその願いがかなった時、Troilusの魂は第八天に昇り、自分の死を嘆く人々を笑う。Criseydeがトロイを去ったのち、全く無力になってしまったPandarusにとってはCriseydeの裏切りは完全に彼の息の根を止めるものになる。そしてついに彼はTroilusが第八天から笑いを向ける人々の中の一人に成り下ってしまう。一時は恋の道でのTroilusの指南役であったPandarusと、従順な弟子であったTroilusは今や、全く地位が逆

転してしまうことになるのである。

このようにPandarusとTroilusを見ると、PandarusがTroilusのために大活躍し、またTroilusに自分を同化することで、一見すると二人は二人三脚で行動しているように思えるが、実は二人の間の隔たりは全編を通して見出だされるのである。

〈注〉

本稿は、第三回チョーサー研究会(1992年11月7日、於青山学院大学)において口頭発表したものに基づいている。

- (1) PandarusとPandaroの年齢についてはD. S. Brewer, *Tradition and Innovation in Chaucer*, (London and Basingstoke: Macmillan, 1982), pp. 80-88を参照。
- (2) L. D. Benson, ed. *The Riverside Chaucer based on the Works of Geoffrey Chaucer* (Boston: Houghton Mifflin, 1987), p. 490. *Troilus and Criseyde*からの引用は全て、このテキストによる。
- (3) N. E. Griffin and A. B. Myrick, tr. *The Filostrato of Boccaccio* (New York: Biblo and Tannen, 1967), p. 176. *Il Filostrato* 及びその英訳は全て、このテキストによる。
- (4) Guillaume de Lorris, Jean de Meun, *Roman de la Rose*, ed. Félix Lecoy (Paris: Librairie Honoré Champion, 1973), Vol. 1, p. 89. 『ばら物語』からの引用は全て、このテキストによる。
- (5) Harry W. Robbins, tr. *The Romance of the Rose*, (New York: E. P. Dutton, 1962), p. 60. 『ばら物語』の英訳は全て、この翻訳本による。
- (6) C. S. Lewis, *The Allegory of Love* (London: Oxford Univ. Press, 1936; rpt. 1973) pp. 157-197. 及び "What Chaucer Really Did to *Il Filostrato*" *Chaucer Criticism*, Vol. 2, eds. Richard J. Shoenk and Jerome Taylor (Indiana: Univ. of Notre Dame Press, 1965), pp. 16-33.
- (7) J. C. ブラウン『ルネッサンス修道女物語』永井三明、松本典昭、松本香訳 ミネルヴァ書房、1988, p. 5.
- (8) Charles Muscatine, "The Feigned Illness in Chaucer's *Troilus*

and Criseyde" *Modern Language Notes*, LXIII (1948), pp.372-77.

- (9) Thomas J.Garbáty, tr. "Pamphilus, de Amore" *Chaucer Review*, 2 (1967), pp.108-34.
- (10) Thomas J.Garbáty, "The Pamphilus Tradition in Ruiz and Chaucer" *Philological Quarterly*, XL IV, 4, (1967), pp.457-70.
- (11) Jill Mann, "Troilus' swoon" *Chaucer Review* 14 (1980), rpt. *Critical Essays on Chaucer's Troilus and Criseyde and his Minor Poems*, ed.C.D.Benson (Buckingham:Open Univ.Press,1991), p.155.
"Pandarus is clearly relying on the traditional view that 'jalousie is love' in order to use this story [of Horaste] as a stimulus towards the consummation."
- (12) Jill Mann, pp.156-57. " . . . , he [Troilus] can neither identify with, nor dissociate himself from, the fictional Troilus in Pandarus' story."